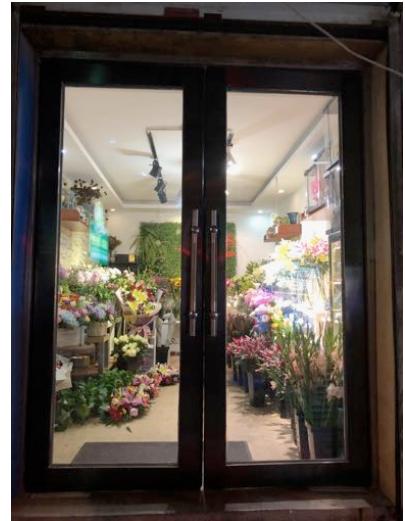


## 中国・東北三省歴史の旅（3/4）

長春では、長映旧址博物館の見学と偽満皇宫博物館を訪れるのが主たる目的であったが、その前に旧満州時代の建築遺跡群を眺めて歩き、合間に東方餃子王での昼食、そして午後に博芸茶荘での伝統の喫茶も組み込まれていたその長春には18時過ぎに到着。即レストランへ、となつたが、探しあぐね、夕食は少し遅れた。おしゃれな花屋を見かけた

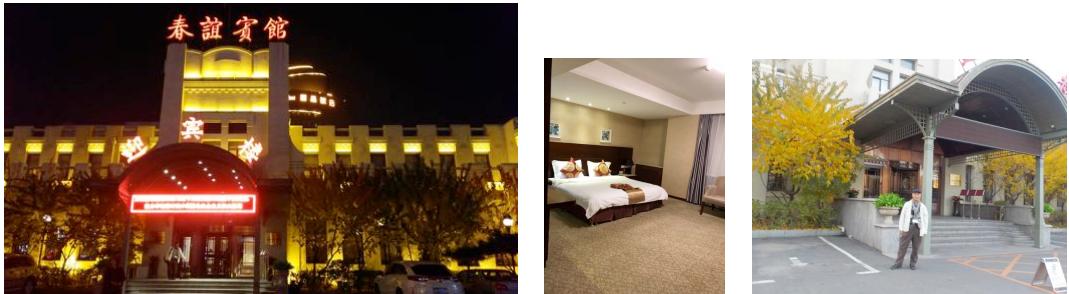


最年少者の桑原さんは俄然ハッスル。楽しい夕餉になり、翌日の予定が一層楽し気に感じられた。若い2人はコップ一杯の白酒を注文。私は、瀋陽での見学が心に重荷を背負わせたように見て、飲み干すように勧めたが、2人はこの強さに閉口。



宿泊は、春誼賓館（旧大和旅館）だった。向かいのはるか先に長春新駅が望まれた。日露戦争で勝った日本は長春以南の東清鉄道支線に関する権益をロシアより獲得し、南満州鉄道株式会社を設立。1906年に長春駅を新設し、交通の要衝とした。そして、新京と改称し、満洲の首都に定めた。現在は長春に戻されており、新々駅が完成し、仕上げの段階に入っていた。吉林省政府は省内の政治、経済、文化の中心地としており、人口約750万人。漢族を始め、満族、朝鮮族、回族、モンゴ

ル族、シベ族など 38 の民族から構成される。ちなみに、中国には多くの少数民族が住んでおり、漢族を主に計 56 民族がすまう。旧大和旅館もよかったです。



翌 3 日目に 731 部隊という非人道的で言語に絶する遺跡見学が控えていただけに、まるでインターバルのごとくありがたい 1 日が始まった。幸い、心地よい朝を迎える、いつも朝が早い岡田さんと巨大な新駅を見に出かけた。



朝食は、初めて下町の食堂でとることになった。「山盛りにあっても、鉢すれすれにそいでも 1 盘 8 元（約 140 円）」「モットよそえ」と勧められたが、品数を試したい。おかげで念願の硬いトウモロコシを軟らかく戻したお粥を味わえた。他に、豚頭なども食した。若い 2 人は「チョッと…」といって向かいのラーメン屋へ。2 班に分かれて食べたのはこれが最初で最後。



「ラーメンが旨い」と教えに来てもらえたので、おしかけて一箸ずつ2種を賞味したが、ふとこれまでの中国の旅を振り返った。この手のラーメン専門店を見たのはこの旅が初めてで、かつて辛くて汁がないタンタン麺に閉口した体験を思い出した。



食後しばらくそぞろ歩きを楽しんだ。まず豚饅を売る露天商にとても心惹かれた。さしづめ商社時代の初期なら、海外出張時の朝食は「これ2個」で済ませていたのではないか。日本はアメリカの数分の1の所得だった。道路掃除婦の箒は手作りと見た。



ライチの壁のごとく積み上げた陳列に驚き、一包み買い求め、長映旧址博物館に向かう専用バスの中で賞味。前日は重い荷を背負いこむような1日であつただけに、こうした観光のごとき日程を挟んだ劉穎さんの配慮に改めて感謝した。また、この旅の間に、鈴木さんの結婚記念日があったことも知った。彼女が「夫の許しを」といった事情もこれで分かったし、女性にとっての結婚記念日の重みも知りえたような気持ちになった。実はこれが後に、私はとてもありがたいヒントとして活かすことになる。

満映とは、旧満鉄が作った映画製作会社（満州映画協会）の略称で、2011年から今の長影旧址博物館になっている。



旧満映は、日本が旧満州国建国の理想として掲げた「日満親善」を始め「五族共和」や「王道樂土」を目指していたことはすでに触れた。満州人にこの教育を徹底するのが目的で作られた国策会社だ。つまり、「満州建国精神の普及徹底」を目的として謳い上げたわけだ。その活動は2代目所長の甘粕正彦から本格化する。その甘粕は、関東大震災のサクサまぎれに大杉栄を殺害した憲兵大尉だった上に、満州では謀略機関の親玉になっていた。こうした男に岸信介らは満映で君臨させたわけだ。

その辣腕は現地スタッフにも魅力的に見えた。才能を認め、信賞必罰を旨としながら待遇面での日本人と格差や、溝を埋めようとした。また、日本人スタッフには満州の地に骨を埋めるまでの覚悟をさせず、日本に帰っても錦を飾らせようとしていた。

中国共産党は1945年10月1日に満州を解放し、満映を接収した。すみやかに長影撮影所として党のプロパガンダ映画の製作に当て、満映の機材や幾多の居残った日本人技術を生かしている。







甘粕が自殺した部屋は残されており、丁重で上手な生かし方と私は感じた。岡田さんに旧満州を理解する上で大事な訪問と教わり、結構時間をかけて見学した。昼食は、餃子の有名店で数々の品を賞味したが、豊かな会話もご馳走だった。



喫茶の一時もありがとうございました。感慨深げにウーロン茶を賞味。中国では喫茶時に茶菓子を食べないようだが、所望し、従業員のオヤツを差し入れてもらった。





これまでの中国の旅では、少なくとも敦煌まで行った時は、まだこうした喫茶は北京では望めなかった。贅沢ということで、文化革命時に、宮廷好みのような料理と共に排斥され、贅沢な料理のレサイプも破壊された、と聞いた。余談だが当時、峨眉山山頂には1軒しか食堂がなく（観光客は昼までに下山するか、昼食後に登っていたよう）で、中国人だけが食事をとっている店で食すことができた。大勢の食器を1つのドラム缶にはった水につけてすぐだけで、水はカフェオレのごとし。ガイドは調理場まで案内し、そこで食材を見せながらメニューを決めた。粗末だし不衛生に見えた。私は熱い汁ものに箸とレンゲを先づつけてから食し始めたが、ここでの食事が最も美味だった。文革逃れた調理人がひつそりと腕を振るっていたのでは、と勘織った。火を通してないものは出なかった。

ひょっとしたら、今回は8回目の中国旅行かもしれない。大きな食堂でタンタンメンの辛さに閉口した時も1人だったし、同じく北京で、確か午後2時を過ぎて昼食を、と探しに出たが、いずこも閉店。やっとホテルの食堂（休み時間に入っていたが）は「カレーライスなら」、となった時も1人だった。さらに、日本語も英語も通じなかつた百貨店にも1人で入っている。販売員の応対に「客面など許さない」といった態度に爽やかさを感じた。販売員は全員、インスタントコーヒーの瓶のような容器に茶葉が入ったまま持参しており、飲み干すと湯を注ぎ込んでいた。当時は、出し殻を飲んでいるように見たが、後年ウーロン茶は一煎目は捨て、高級品は7煎も8煎も味わえることを知った。

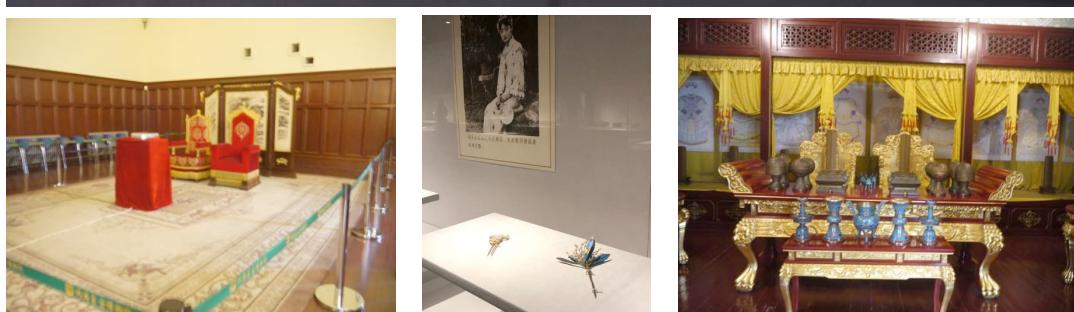
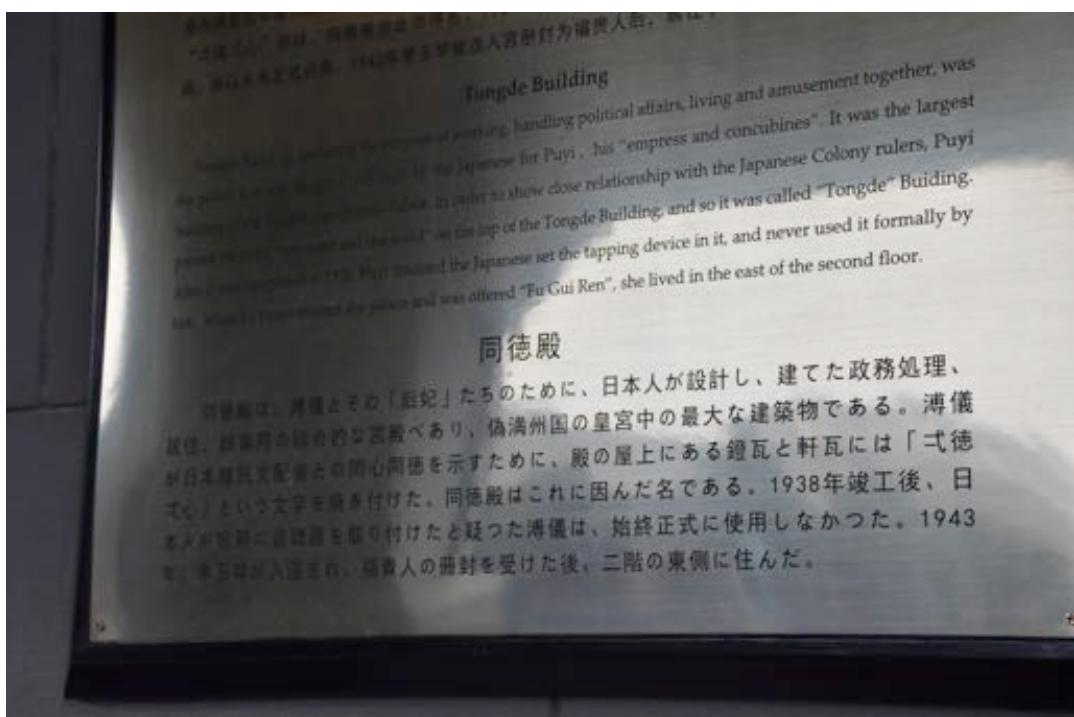
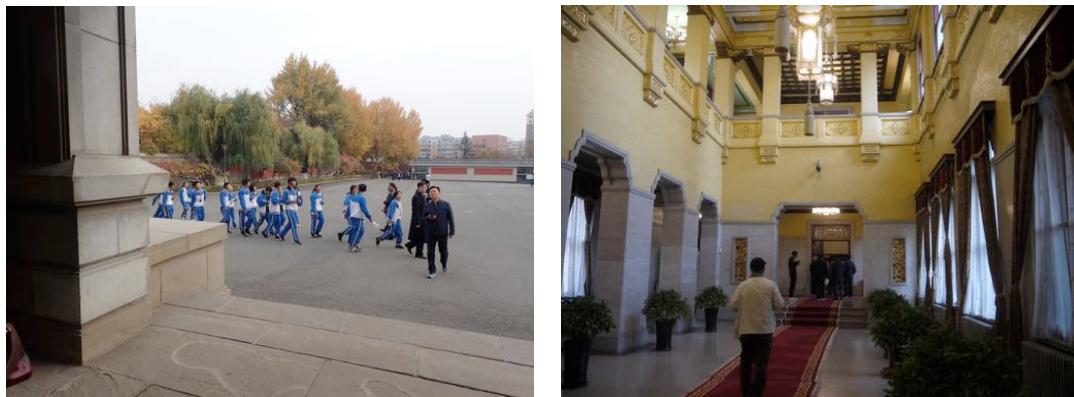
このような思い出に浸りながら、旧満宮皇博物院に向かった。

とても広くて、きれいに管理されていた。それだけに、冠の「偽」という文字が目に飛び込んできた時に心を新たにしており、改めるべき何かをここで確信している。まず、人間としての真の誇りや尊厳、あるいは自信とは何か、を考える必要がある、と思った。



屋内に入ろうとして、説明版が目にとまり、キッチンと読んだ。傀儡国家であつただけに、言行一致に誠実に勤めるべきであった、と思った。建国の理想として「五族共和」による「王道樂土」をかざしながら、愛新覺羅溥儀に疑われるようでは話にならない。それでは、欧米列強が展開した植民地政策以下だ。

わが国は、工業化が進んだ列強が植民地政策は「手じまいの頃」と思い始めていた時に、いまだ農業国体質であったわが国は植民地政策に活路を求めた。そこを列強に突かれて、袋叩きにされ、列強に免罪符を与えたようなことになった。それではマズイと気付いていた石橋湛山は、小日本主義を発想し、通商による繁栄を唱えたにもかかわらず、こさかしいやり方で堰を切ったように乗り出した。



せめて、列強に力で邪魔をされて、負かされて列強に「偽」との烙印を押されようが、日本が掲げた「日満親善」に徹するやり方をしていたら、と考えずにはおれなかった。先ず満族と手を携えて「満州建国の精神」を貫いていたら、つまり手を携えて植民地解放に助力し、独立をもって引き上げて、後は通商に徹していたら、どうなっていたか。

もちろん、この間に中国でも革命が起こっていたわけだ。その革命にも誠実に助力して…、といった実行を、つまり謳いあげた建国の精神通りに「**五族協和**」して「**王道樂土**」を切り拓いていたら、その後どうなっていたか。わが国は「まぼろしのしの満州国」と表示し、中国は「旧満州国」と表示していたかも知れない。それはともかく、「日満親善」のスローガンを信じ、欺瞞に気付かぬままに命を落とした皇軍兵がいたはずだ。少なくともそれを信じ、そのために息子や夫、あるいは父を失ったと信じたまま爆撃などで命を失った人も多いに違いない。

もちろん私は、知覧や山口県の回天基地も訪れており、どのような心境で若者が命を投げ出したのかも、それなりに知っている。難しいことは分からぬが、戦争が人を狂わせることだけは確かだ。その前に、好戦的な考え方自体が、人の判断力を狂わせることも事実だ。武器がない地域や国に乗り込んで、抵抗しない相当数の住人を武器で根こそぎ消した事例は未だ知らない。奇妙なことを考えながら見学した。要は、当時の日本は植民地政策時代にババを、それも偽りのスローガンを掲げてババをつかんだ。



子ども連れも多く、外苑を散策しながら、わが国の若者や未来世代に思いを馳せた。未来世代が（海外に出て、初めて日本の過去の事実を知り、驚愕するような意味での）内外落差は速やかになくすべきだ。未来世代に禍根を残すようなことは避けたい。

幸か不幸か、今や情報は瞬時に世界を駆け巡る。年々異常気象は深刻になっている。誰しもが1つの地球に乗り合わせていることを実感しつつある。好機ではないか。人間の性として、あるいは人類の問題として、さまざまなことをとらえ直し、「人」として、あるいは人類として、望ましきありようを追求すべき時ではないか。

戦争が人間を狂わせることを自覚しあう上で、日本は最も恵まれた立場にある。人類史上まれなほど非道（前日も初めて知ったことがあった）な経験も（戦争という魔力によって強いられたことも）あった。原爆被爆という人類史上で最も非道な体験もした。だからこそ憲法9条を堅持してきた間に合う。これを公正に実践してみせてはどうか。こうした目標のためなら、日本人の多くは真のサムライニッポンの心を示すに違いない。

かく3日目の予定を消化し、17:06発の高速鉄道でハルビンを目指して北上した。